

「おはよう、イースターの朝」

マタイによる福音書 28章 1節～10節

説教 軽込 昇 牧師

主イエス・キリストは復活されました。十字架にかけられた主イエス・キリストの復活こそ、すべての人間の出発点です。キリストが復活されなかったら、一切が空しい。キリストが復活されたので、わたしたちは神に造られ、愛されている、どんな人間も生きる価値があるとはっきりわかりました。

主イエスの十字架の死の後、週の初めの日の明け方に、婦人たちは、なきがらに香油をぬるため墓に急ぎました。墓に着くと、入り口をふさいでいた石はわきへ転がされており、天使が告げます。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われたとおり、復活なさったのだ」(5節)。墓は空だった。十字架の主イエスがよみがえられたのです。十字架と復活とは一直線につながっています。

主イエス・キリストの十字架はわたしたちすべての人間の罪、問題を担っての死でした。そのお方がよみがえられた。神によって、復活させていただいた。十字架の上で贖いが完成した。だから、キリストの復活がわたしたちの力になります。

天使は語ります。『あの方は死者の中から復活された。そしてあなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』(7節)。弟子たちは、主イエスを裏切ったのです。出身地のガリラヤに帰るしかない敗残者、その彼らに復活されたイエスが現れてくださるといいます。

主イエスは婦人たちに「おはよう」(9節)と呼びかけられました。その声は穏やかで、しかし力強く、わたしはよみがえったのだ、あなたを赦そう、まことの命を与えよう、さあ、生きるのだ、そのような響きを持っていたでしょう。「おはよう」は口語訳聖書では「平安あれ」と訳され、ギリシャ語で「喜びなさい」、ヘブライ語のシャローム(平安あれ)につながる、当時の人々がふだん使っていた挨拶の言葉です。

しかし一方、イスカリオテのユダの「先生、いかがですか」(マタイによる福音書26章49節)と同じ言葉であり、「ユダヤ人の王、ばんざい」(27章29節)も同じ言葉です。同じ言葉で誰かをあざけり、裏切りかねない。ここにもわたしたちの罪の姿があるのです。

主イエスは復活の朝、「おはよう」というお言

葉でご自身を示され、日常の、私たちが今いる場所に歩み入ってくださった、それがイースターの出来事です。

主イエスが「おはよう」と呼びかけ、招いてくださり、神から「あなたは生きるのだ」と呼びかけられています。あなたのいる場所が神の祝福の場所なのです。だから、わたしたちは主イエス・キリストを信じて歩むのです。

キリストの復活によってわたしたちが神によって愛されていることがはっきりわかり、この世界もまた「良いもの」として造られたと信じることができます。この世界は、多くの問題を抱えた、ドロドロとした世界です。しかし、キリストはその悲惨な世界に入ってください、よみがえって共にいてくださるのです。この世界をキリストの恵みが覆い尽くしています。

わたしたちはやり直せるのです。たとえ信じられないわたしたちであっても、信じる者に変えてくださるのは主イエスの復活です。主イエスが復活されたので、わたしたちは神に帰れるのです。悔い改めることができます。どんな人間でもやり直せるのです。

イエスさまに「おはよう」と呼びかけられたわたしたちも、「おはよう」と誰かに語りかけるようにと召されています。

第一は、神に向かって。キリストの復活を伝える、それは神を賛美し感謝し、礼拝することです。第二は、わたしたちと共にいる人々に向かって。あなたは愛されている、あなたは喜んで生きることができると呼びかけるのです。心にかかる方に手紙を書いたり、電話を掛けたりいかがでしょうか。第三は、わたしたち自身に、人生を神の贈り物として受け取ることができる、と語るのです。

墓の封印がとかれたように、わたしたちを縛り付けていた古い刻印も消え去って、代わりに『この者は甦りの主イエスのものである。誰も手を触れてはならない』という新しい刻印が押されています。わたしたちは神のものとしています、それがイースターの出来事です。洗礼はわたしたちにとって、この刻印です。まだ洗礼を受けておられない方は、キリストの刻印を刻みつけていただくことを願ってください。

(記 説教要約奉仕者)